熱田神宮桐竹会創立８０周年記念

熱田の杜演奏会

第一部　太鼓　熱田神宮太鼓教室

第二部　雅楽　熱田神宮桐竹会

熱田神宮桐竹会
〒456 - 8585　名古屋市熱田区神宮１丁目１番１号
TEL　052(671)4152　　FAX　052（671）0421
熱田神宮ホームページ　https://www.atsutajingu.or.jp

～ごあいさつ「熱田神宮桐竹会」～

熱田神宮桐竹会は、熱田神宮の舞楽神事や恒例の祭典に雅楽を奏でる奉仕団体で、昭和１９年に結成されました。そして今では、愛知県・三重県・岐阜県より、熱田神宮を崇敬し、且つ雅楽の奏法技術に熟達した約５０名の会員が集い、日々神明奉仕に励んでいます。

その奉仕姿勢は厳格な上に雅やかであり、更なる技術の向上を図るため、日々の研鑽は基より、毎年宮内庁楽部より楽師の先生をお招きし、ご指導を仰いでいます。

さて、こうした活動を通じて日本古来の伝統音楽である雅楽の保存と普及に努める我々桐竹会は、今年設立８０周年という節目を迎えました。本日の奉納演奏会は、この周年を記念する事業の一環として開催されます。熱田神宮に流れる悠久の歴史の一端を担う誇りを胸に、これまでの歩みの成果をご覧いただきたく思います。どうぞごゆっくりご鑑賞ください。

～雅楽「管絃楽と舞楽」～

雅楽はその起源系統によって「国振歌舞」「大陸系の楽舞」「歌物」と三種類に分かれます。「国振歌舞」は、上代の神楽であり、東遊や大和歌、久米歌など日本古来の歌謡に基づき、平安時代に今日の形に完成した声楽。「大陸系の楽舞」は５世紀頃から９世紀初めまでの約４００年間に亘って支那大陸や朝鮮半島を経て我国に伝来し、アジア大陸諸国の音楽舞踏に基づいて平安時代に完成した器楽と舞。「歌物」は雅楽器の伴奏で歌われるようになった声楽で、民謡を歌詞とする催馬楽や漢詩を歌詞とする朗詠があります。

そしてさらに「大陸系の楽舞」は、大陸から伝来した唐楽、朝鮮半島から伝来した高麗楽に分かれます。高麗楽は、舞を伴う音楽である「舞楽」という形式のみですが、唐楽は「舞楽」のほかにも、舞を伴わない器楽合奏である「管絃楽」の形式が伝承されています。「管絃楽」と「舞楽」では楽器の編成が異なります。また同じ楽曲でも、「管絃楽」に比べて「舞楽」のほうがリズムを重視した演奏をします。

～ 熱田の杜演奏会 ～

プログラム

◎日　　程　　令和６年９月7日（土）

◎演奏曲目

《第一部》　午後３時より　～　太鼓　　熱田神宮太鼓教室　～

《第二部》　午後５時より　～　雅楽　　熱田神宮桐竹会　～

国歌　　君が代

歌詞は１０世紀初めに編纂された『古今和歌集』に収載の短歌が原歌（もとうた）とされ、現在の歌詞と同様の歌は平安時代末期に見受けられます。祝賀の歌として、和歌・文学や謡曲・小唄・浄瑠璃・琵琶歌等の諸芸能に取り入れられ、永く広く人々に愛されました。

明治時代初期、軍人大山巌（おおやまいわお）が日本国歌の必要性から君が代を国歌として提案。曲は当初のものから改められ、明治１３年（1880）に宮内省楽部伶人長（れいじんちょう）林広守（はやしひろもり）の作曲として発表され、今に至ります。雅楽壱越調の旋律で、荘重かつ簡潔な名曲です。

管絃楽　　盤渉調（ばんしきちょう）　≪音取（ねとり）≫

音取とは一種の音あわせの意味を持ち、雅楽の六調子（壱越調（いちこつちょう）・平調（ひょうじょう）・双調（そうじょう）・黄鐘調（おうしきちょう）・盤渉調（ばんしきちょう）・太食調（たいしきちょう））全てに配されています。短いながらも、音階や旋律法が巧みに取り入れられ、その調子の持つ音楽的特徴を味わい知ることができます。

盤渉調（ばんしきちょう）　≪白柱（はくちゅう）≫

別名に≪徳貫子（とくかんし）≫≪児女子（じじょし）≫ともいいます。元明天皇即位に際し作曲されたともされていますが、定かではありません。

盤渉調　≪千秋楽≫

後三条天皇の大嘗会に、当時笛の名人で風俗所預の役目にあった源頼能が勅命によって作ったと伝えられています。一説に唐代の開元年間８月５日の千秋祭に作られた曲ともいいますが、日本で作られた曲と考えるのが妥当で、古来この曲は法会での衆僧の退出楽や宮廷での退出音声などに奏される習わしとなってきました。

神楽　≪みつるぎ≫

平成６年、熱田神宮桐竹会創立 50 周年を記念して作られた神楽で、作歌・作曲・作舞はそれぞれ、元熱田神宮宮司岡本健治・元宮内庁楽部首席楽長の東儀文隆・同楽部楽長の薗広晴によります。本日は、巫子 4 名が舞います。歌詞は以下のとおりです。

「千萬の　民の祈りに　まさやけく　いよよ照り坐す　御剣の光」

舞楽　≪登天楽≫　平舞

平安時代の初期に我が国において作舞されたと伝えられていますが、起源は詳かではありません。登殿楽とも書きます。舞人は鳥甲を被り、襲装束を著け、袍の右肩を袒ぎ、順次舞台に昇ります。

舞振りは優雅で、曲名の由来ともいわれる、舞人が舞台の前と左右両隅で双手をあげ、天を仰ぐ姿が特徴的です。

≪陵王≫　走舞

古代中国北斉の将軍“蘭陵王長恭”は、大変顔が美しく、戦の最中にあっても味方の兵士が見とれてしまうほどでした。士気がさがることを恐れた将軍は、いかめしい面をつけて周を攻め、勝利をおさめました。これを祝してこの舞が作られたと伝わっています。本国にわたってきた時期は不明ですが、一説には林邑の僧仏哲が伝えたともいわれています。

金色の桴を手に、舞台を縦横無尽に駆け回る様は実に勇壮です。

≪落蹲≫　走舞

雌雄の竜が楽しげに遊ぶ姿をかたどった舞≪納曽利≫を１人で舞う場合、≪落蹲≫と称されます。この舞は印度で作られ、支那を経て我が国に伝えられたといわれています。平安時代に、競馬や相撲の節会など勝負事に際し、陵王と共によく奏されました。

竜の顔を模した面をつけ、銀の桴を持って舞います。